

「HSK 季刊わたぼうし」 第39号

発行者:わたぼうし連絡会
発行日:1995年(平成7年)11月10日 '95 秋号

第39号のテーマ 家族Ⅱ

仲間には 仲間の話題 車いす

作：比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義・主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

テーマ「家族Ⅱ」

家 族

地域住民・団体職員

今回、「家族」というテーマで文章を書いて欲しいと依頼されたので書きました。 家族といっても、私は今まで考えたことはありませんでした。しかし、今回これを書こうとしたことによって、いろいろ考える機会が与えられたなと思いました。

家族というと頭でイメージするのは、父親がいて、母親がいて、おじいさん、おばあさん、子どもたち。これが一般的な家庭(家族)だと思います。そしてお父さんは仕事をして一家を養い、おかあさんは家事、洗濯、ま、中には仕事に行かれるお母さんもいるでしょう。そして子どもたちは学校へ。その中において家族の連係プレーというものが見出されると思います。

私は、親は子供のために一生懸命働いて学費を稼ぎ良い学校へ出してあげ、子どもは一生懸命勉強して良い学校を卒業し、良い所へ就職して親孝行してあげる。これが理想的な親子であり、理想的な家族だと思います。

また、日常生活において、朝夕家族そろって食事を食べ、夕方はその日のあった出来事を話し合い、団らんの時間を持つのが素晴らしい家族だと思います。しかし、現実には仕事の関係で家族がそろえない、ということがあるのではないかと思います。父親の残業、単身赴任等です。都会へ行くと、家族がバラバラだというケースが多いのではないかと思います。

現実には先ほど書いた理想的な家族というわけにはいきません。誰か病院で入院した人ができると事情が一変すると思います。しかし、そういうときにこそ残った人で連携プレーを組んで助け合いができると、それはまた素晴らしいことだと思います。

それから、最近で核家族化が進め、子供を一人しか産まないということで寂しい家族も結構できているのではないかと思います。

それから、家族の思いやりというものも考えました。私の母親は身体障害者1級で七尾市にある重度障害者施設に入所していますが、他の人を見ている、やはり何度も面会に行くのは家族の方だと思います。確かに親戚や知人で面会に行く人もいるかも知れません。もし、身体障害者になってしまうと、一番心配し、面倒を見るのは家族の方です。家族には切っても切れない関係があります。そういう時に家族って素晴らしいなと思いました。それが家族の思いやりです。

また、私の母親は左半身が全く動かず、自分のこともできないのですが、自分の息子の嫁さんはまだ見つからないのかとか、その他いろいろ子どものことを心配しているのです。やはり、親は自分がどんな姿になろうと我が子のことを心配するのは、変わらないなあと思いました。

今回、このテーマを考えることによって、家族の素晴らしさ、思いやりを実感しました。

母の思い出

地域住民・養護学校教員

今年の5月、母の十七回忌をした。母の死後、よくこんなパターンの夢を見た。それは「母と私が買い物に行く。場所は片町。今はマクドナルドがある前あたりで母が言う。『ちょっと、待ってて……。すぐ戻るから……。』後ろ姿が人混みに消え、いろいろな人をやり過ごしながら待つ私。でも、母は戻ってこない。もう少し、もう少し。」そのうち目が覚め、ああもう母はいないのだと悲しみにおそわれる。

私は一人娘(一人っ子)として、母の愛を一身に受けて育ち、正直いって、何一つ冒険できない身の上をかなり負担に感じていた。しかし、母の側からすると、娘の私は幼児期に肺結核を患い、片時も気を抜けない病弱児であり、食事やすべての面で、他の子以上の苦労を強いられて大変だったに違いない。

母の願どおり、私は教職に就き、これから楽をさせてやりたいと思ったとき、母はガンに倒れた。せめて最後は自宅でという先生方の意向で、末期には病院を退院し、父娘の看病が始まった。背中をさするととても喜んでくれ、「手当て言葉の意味、本当やね。とても気持ちいい」と、言ってくれたりした。5月の若葉が目まぶしい頃、母が枯れ木のようにやせて亡くなり、私は涙で目がまぶしかった。棺の中には、大好きだったベートヴェンの「ロマンス」のレコードを入れました。

今、母が生前会うことのなかった主人と三人の子どもたちが墓前に花や線香をあげている。私は生前の母の口調と一緒に口調でそれらを指揮している。その時、ふと、私の中に母が生きているような気がした。

私の家族

地域住民・酪農家

ハレルヤ!私たちの家族の朝はこの言葉で始まります。朝、目が覚めると、まず外に出て、大空に向かって手を上げて、ハレルヤと神様を賛美します。

私たちはクリスチャンホームで、毎朝ピアノをひきながら、神様を賛美し、聖書を読み、祈るひとときをもっています。きょうも命が与えられ、生かされていることに感謝しながら、きょう一日の歩みを神様に委ね、導きを祈ります。1歳と0歳の幼い子どもたちもともに祈り、神様を賛美しているみたいです。

私たち家族が毎日歩いていけるのは、自分の力や才能によるのではなくて、常に恵みと真実を持って導いてくださるイエス様が共にいて下さるからです。

私たち家族は本当に小さな取るに足らない家族ですが、こんな私たちにも、目を留めて愛して下さること。この事が私たちにとって大きな喜びです。

私たちの好きな賛美に イエス様がいて下さるから、明日はこわくない イエス様がいて下さるから、恐れは消え イエス様がいて下さるから、人生は素晴らしい 彼にすべてを委ねた今は という曲があります。

この素晴らしいイエス・キリストというお方をぜひ多くの方に知っていただきたいと思っています。

特別寄稿～阪神大震災に思う～

阪神大震災

地域住民・主婦

忘れもしないあの日の早朝、私はたまたま早く目覚めたので、協会の記録を整理していたとき、突然、激しい揺れを覚え、本能的に時計を見ました。6時にまだ10分以上でした。(正式には5時46分と後で知った)。いったいどこかしらと思う余裕がありました。やがて兵庫県南部と報道され、時刻を追って被害の甚大さが知らされてきました。神戸といえば、ごく親しい親戚のいるところ、東灘区という地名が繰り返し流される度に、いたたまれぬ思いでした。

四日ばかり後、彼女と電話連絡がとれ、幸いなことに家も倒れず、親子無事と知って安心しました。その後、直接あの震災の生々しい体験を聞きました。私が一番感動したことは、震災直後はただ呆然自失、何もする気力もわいてこなかったのに、全国各地からの友達の支援の手、とりわけライフ・ライン復旧のため不眠不休、休むといっても冬空のもとテントしかない、といった厳しい状況の中で、神戸市民のために奉仕して下さるその姿を目の当たりにして、それまで無気力であった彼女の心に大きなそして、素晴らしい変化が起こったことです。早く水を、早くガスをといった願も、もう身勝手なことに思われ、毎朝、早くから給水車を待って長い列に並ぶのも苦でなくなったということです。75歳の彼女は2年ほど前まで喫茶店を経営していましたが、やるぞ！まだ5年間働くぞ！と本当に意気軒昂、あの不孝が逆にバネとなってこうも変わるものか、人間の心の強さと尊さを学び取りました。

阪神大震災は、おそらく日本が初めて経験する問題を投げかけています。端的に言って個人(市民)と行政側との利害の対立をどのようにして乗り越えていくかということです。50年前、日本の主な都市は黒土化しました。あの時は、日本人の一人ひとりにまだ<個>の意識と自覚はありませんでした。すべてはお国のためにと教育されていました。でも、今は違います。民主主義の発達と個の自覚は、昔に較べれば天と地の差があります。

行政は遠い未来へのビジョンを念願に夢を持ち、被災者の方はみな、今の苦しい生活をどう切り抜けるか、先祖伝来の土地はどうなるのか、といった不安が付きまといまいます。そのいずれもがごく当然な思いです。いずれの側にも名文はあります。この溝をどうして埋めていったらいいのでしょうか。私は神戸という日本の中でも最も世界的な大都市を舞台にして、壮大な実験がなされようとしていると思うのです。時あたかも20世紀末、世紀にまたがる大事業です。地震にも風水害にも、強い理想的な都市の建設に向けて始動したばかりです。確かにそこには、建物など「物」ができるのです。でもそうした「物」が作られる前に大事なことは、市民と国県市町村等の行政との暖かい心のつながりでしょうか？

阪神大震災に思う

地域住民・主婦

過ぎし日の阪神大震災は、本当に悪夢のような出来事でした。あの日、テレビに映し出された映像は、全くの地獄絵図でした。

そして、そこには生死の明暗を分けるようないろいろなドラマがあったことと想われます。とりわけ身体障害者の方々のご苦勞は、大変であったと推察されます。

その後、施設長さんの会議がありまして、神戸のある施設長さんのお話によりますと、この方のお家も倒壊したのですが、我が家をかまっている暇もなく、直ちに身体障害者対称の駆け込み小屋を造り、ここに事務所を置いて地域の施設長さんが皆、交替で張り付き約一ヶ月の間、困りごとを善処されたと伺いました。近隣の施設はもとより、私ども彩光苑でも、もし要請があればと受け入れの準備もいたしましたことでした。

そして、今だにご不自由は余儀なくされている多くの被害者のご様子を、時折テレビのニュースで拝見する度に、本当にお気の毒でなりません。この盛夏も、テントで暮らす方も多いとか……。先日のニュースによりますと、避難所は解除されたそうですが、まだまだ山積みされている難しい問題がたくさんあるようです。

被災者でもある藤本義一さんのお話によりますと、あの瞬間、書庫の本が鳥のように宙を飛ぶのだそうです。ですから、あまり高いところに物を置かないこと、また、飛び出した戸外の足元は危険物で一杯。靴は底の厚いものをはいて出ることなど、経験者のさまざま注意がいつも後から出てくるわけです。

災害は、いつでも忘れた頃にやっけていきます。日頃から、災害に対する心構えを怠りなく、その為にも、私たちの苑でもいつも訓練が行われているわけです。

この度のさまざまな不可抗力の場合は、ともかくとして、不注意で尊い生命を落とすことのないように気をつけたいと思います。

また、この度の災害には、全国民がこぞって支援したはずで、これからも折に触れ、手を差し伸べる勇気を忘れないでほしいものです。そして、一日も早い被災地の復興をお祈りするばかりです。

最後に、この度の災害で、悲しい初盆を迎えた故人の方々のご冥福をお祈りいたしましょう。合掌。

福祉用語の解説

クオリティ・オブ・ライフ(QUALITY OF Life QOL)

「生活の質」「人生の質」「生命の質」などと訳される。一般的な考えは、生活者の満足感・安定感・幸福感を規定している諸要因の質。諸要因の一方に生活者自身の意識構造、もう一方に生活の場の諸環境があると考えられる。この両空間のバランスや調和のある状態を質的に高めて充足した生活を求めようとしていること。この理念は、医療、福祉、工学その他諸科学が、自らの科学上・技術上の問題の見直しをする契機になった。社会福祉および介護従事者の「生活の場」での援助も、生活を整えることで暮らしの質をよりよいものにするというクオリティ・オブ・ライフの視点をもつことによって、よりよい援助を求めることができる。(参考：中央法規出版「介護福祉士用語辞典」)

みんなの広場

富田木歩について

M.S

以前、永六輔さんがラジオで、病院で若い看護婦さんが、人生の大先輩である老人に、幼児語で話しかけているのは問題があるのではないか、きちんとした尊敬語で話しかけるべきではないのか、といった旨の話をされていたことがあった。私も全く同感である。私とそのラジオを聞いたのは五年以上前だったと思うが、事態はどれ程変わったのだろうか……。

所で、今回、編集室から「私の介護体験」というテーマでの原稿を依頼されたが、私に文章にするような介護体験がないので、本公文庫『日本の詩歌・30』という俳句集の中に載っていた富田木歩という俳人のことで残りのマス目を埋める勝手を許してほしい。

富田木歩、本名一。明治30年4月東京生まれ、二歳で病により両足が不自由になり歩行困難。小学校教育を受けられなかった彼は「イロハがるた」等で文字を習い覚えた。家は極めて貧しく、姉妹四人は苦界に身を沈め、弟はろう啞という境遇。どういう経緯で俳句の世界に近づいたかはこの本からは不明だが、最後は自由垂浪という当時の高名の俳人に師事。木歩という俳号は「哀れ我が歩みたさの一心にて作りし木の足も」と本人も書き残しているように生活実感の中から。木歩は20歳を過ぎてから貸本屋を開いてもらい俳句に親しんでいたが、あの関東大震災で一度は友人に背負われ逃げたが途中で焼死。享年27歳という若さ。「境遇」への同情の心を傾けるよりさきに、彼の俳句の清純さは、われわれの襟を正しめる。「彼の短命は悲しむべきだが、己を生かしたことは偉とすべき」と大野林火が解説に書く。

最後に彼の苦を。背負われて名月拝す垣の外／枸杞茂る中よ木歩の残りたる／我が肩に蜘蛛の糸居る秋の暮れ 木歩には友人により編まれた句集が何冊もあり、興味のある方はぜひ一読を。

希望ヶ丘公園に行って

編集委員・桶屋善一

先日、七尾市にある希望ヶ丘公園に行くチャンスが与えられました。10年近く七尾市に住んでいるが、初めて行って来てびっくりしました。豊かな自然の中で子どもたちの遊び道具がそろっていました。芝生の中にブランコ、滑り台などがそろっており、子どもたちが親子で走り回っていました。

それを見ていると、自分の幼い頃を思い出しました。私は6歳から施設に入っており、親子で遊びに行った思い出はありません。しいて言えば、施設の親子旅行かな。

また、この公園には昔、七尾線に走っていたSLのC56の本物が展示してあり、子どもたちが運転席に乗り降りして遊んでいました。

このSLの説明を読むと、昭和47年に富山の「こまどり学園」を舞台にした映画「とうちゃんのポーが聞こえる」の撮影に使われたそうです。私もこの映画を見たいと思っていたが、まだ見ていません。吉沢京子さんが演じる女性がガンでこまどり学園に入院しており、その父(小林桂樹さん)がSLの運転手をしており、女性がベッドで寝たきりの生活をしているときに、学園の前を通るときに「ポー」と汽笛を鳴らしたという映画だったと見えます。結局はこの女性は亡くなってしまったのです。

なお、この映画は本当に実際にあったことを映画にしたものです。

この公園の障害者に対する設備は、スロープ、身障者トイレも整備されていますので、一度、遊びに行かれたらどうでしょうか。バーベキューもできるそうです。

見つけた、自動販売機

編集委員・桶屋善一

一

以前、「HSK季刊わたぼうし」第20号にて特集を組みました。「障害者と自動販売機」にて下出幸作さんが提案されていたようなものをJR和倉温泉駅で見つけました。

それは、大塚製菓の自動販売機でした。お金の入り口もお椀のようになっており、お金が入れやすくなっており、正面に小銭を出しやすいように台がついていました。取り出し口も広がっていました。

これは、「HSK季刊わたぼうし」が提案したから出てきたとは思えませんが、(もし、そうだったらうれしいが……)それだけ社会の弱者への考え方への変化だと思います。一步一步ですが、社会が変わりつつあります。

私たちが施設や家に閉じこもっていないで、もっと外に出て行って自分たちをアピールしていきますと変わっていくと思います。この自動販売機を作った業者に深く感謝いたします。小さな一步一步ですがこれが大切だと思います。

「HSK季刊わたぼうし」でもっと身近な話題でテーマを取り上げたいと思います。

シリーズ・キッチンさんの食べ歩き4 七尾駅の弁当

今回は、地元七尾駅に売られている弁当のうち、二つ取り上げてみたい。まずは卵巻き800円、少し高いようにも感じるが食べてみて納得した。

これは卵巻きの太巻きで、中にもかなり大きい卵やその他いろいろなものが入っている。少し全体に甘く仕上がっている。寿司を食べている感じではない。この甘いのがご飯のせいなのか、具のせいなのかわからないのだが、一度食べたら強烈な印象が残る。ぜひもう一度食べてみたい。

次はアジの押し寿司だが、残念だが値段は忘れてしまった。木の箱に入っていて、蓋がしっかり止められていて、中には笹も入っていたと思う。魚の新鮮さも味付けもよかった。

駅弁でアジ寿司といえば小田原か大船が有名だが、僕は大船のものと比べると全然味が違う。大船の物より魚の身も厚いし、味付けも良いのだ。言うまでもないことだが車内販売では絶対に来ないのだ。

この二つのものに関しては、七尾駅待合室の売り場にある。

七尾駅には、この他ちらし寿司や幕の内弁当もある。この二つもなかなかおいしかったが、十数年前のことだから今は何とも言えない。

その他にも、ますの押し寿司や普通の太巻きも売っているが……。

第9回石川県リハビリテーション風船バレーボール大会

10月9日(日)、松任市総合体育館において石川県作業療法士会主催の石川県風船バレーボール大会が開かれた。参加チームは、県内の施設、病院、老人ホームなど50チーム、選手、役員と合わせて千人近く参加した。

私も、某施設から参加したが、余りにも人の多さに圧倒され、試合どころか人に驚かされてしまった。

それでも、選手の皆さんは、日頃の練習成果を出そうとハッスルして試合に望んでいた。今回は決勝戦まで残り優勝した整肢学園の子どもたちの頭脳ブレに感心するばかりであった。

彼らは、大人のチームに対して楽しんでいるように試合をしており、あまり力を入れなくてもどんどん点数が加算されていくのには驚いた。

私もあのような純粋な気持ちで戦えたらと思うが、どうしてもいろんな思いが反映されてしまうので、情けなく思います。

今回は、この「HSK季刊わたぼうし」のために写真撮影、取材に協力していただいた城下健一さんに厚くお礼申し上げます。

試合結果 一位 石川整肢学園 二位 県立中央病院 三位 青山彩光苑リハ部

須戸哲氏講演Ⅱ

1995年5月15日：サンライフ・プラザテ

ーマ：障害者・高齢者の社会参加とボランティア

☆講師、須戸哲(すど さとし)氏のプロフィール

1950年大阪に生まれ、龍谷大学法学部を卒業、その後、一般企業で五年間勤務。1978年に「大阪行動する障害者の会」に参加して、そこからボランティア活動始める。おおさかボランティア教会、京都ボランティア協会で活動する。

1992年に小松市に転居。現在は小松市でボランティア活動研究所をしている。

本来の職業は、老人保健施設で勤務中。その他、様々なボランティア活動、阪神大震災にもボランティア活動を行っている。

そこへ行くたこ焼き屋さん、しょうゆ味のジャンボたこ焼き屋さんの前を車で通ったりすると、「あそこやったら車いすで入れるなー」というふうにみてしまう。自然に見てしまいます。

だから、ものの考え方が障害者の方と一緒になっていますから、今の世の中にとっても住みづらい。

だから、僕は健常者ですから、先日も小松にある施設にいる全く知らない障害者の方から、家に電話をかけてきて「施設を出て、自立したいけれども、相談に乗って欲しい」ということでした。

全く知らない障害者の方に相談に乗ってくれといわれて、「とりあえずは、待ち合わせの場所に行きますから」と行って。この方は施設を出て一人で暮らしたいので、それに協力して欲しい、という相談でした。

話をしていますと、何年来、7,8年そういうことを思っていたということでした。「須戸さん、何か協力してくれませんか」「あなた、一人でやりなさい」で、冷たく突き放したのです。「何か、自分で始めたら」「何から、手を着けたらいいか。わからないから」ミスタードーナツで一時間ほど話していたのですが、なぜ、冷たく突き放したかといえますと、何も自分で考えていなくて、「須戸さんは、障害者の人をたくさん自立させた経験があるから、手伝って欲しい。」「何を手伝ったらいいの」と聞いたら、「手伝って欲しいことが分からない」自分でも何も考えていないので、ということで、「自分で何か始めて下さい。自分で何か始めたら、僕もお手伝いできると思いますけれども、何も始めない方にお手伝いできません。」と冷たく突き放してしまいました。

障害者の方が自分で何かを始めることは、ものすごく大切だと思います。「私こんなことをしたいと思ったら」、それに向かって、自分が一步を踏み出さなければいけない。「こんなことをしたいのだけれども、誰か手伝って」と何かを始める前に、周りの雰囲気を見るのが、日本の障害者の方の大多数です。何かしたければ、自分で動き出すことができないといけない。

自分たちの生活を変えるというのは、自分たちの手でなされた方です。僕が障害者の人にいえることは、おそらく次ぎに同じことを言われるのではないかと、気がするのですけ

れど、自分で何かを始めなければ何も変わらない。

僕は自分の未来にいろいろ心配がありますから、僕の老後が心配ですから、いろんなことを始めています。「ハート・サイド・ネットワーク」という障害を持つ人たちの団体を作ったり、6月24,25日に「おむつはずし学会」という、高齢者の方々のおむつをはずそうという学会を小松で開きます。

これはみんな僕の老後のためです。誰かのためでなくて、僕の老後のためです。それは強いては、皆さんの老後のためです。僕は皆さんの老後のために、僕は皆さんのために頑張っているとは全然思っていませんので、エゴイステックな人間で自己中心的な人間なもので、自分の老後は自分で何とかしたいということで、今僕の活動が、わし？男といふかな。ぜひ、皆さんも、自分の生活を変えたい。ということであれば、自分で行動を起こして欲しい。

動きましたら、周りの方々、職員の方々、友人の方々がそれを支えていく。そのようになれば、日本は少しはよくなるんじゃないか。

今年、金沢の障害者の人たちが、外国へ行きたいということで、10月13日に出発し、アメリカの北米大陸のカナダへ一週間ほど行って来ます。

よく車いすの人たちとグループで行きます。おそらく日本で障害者の方と外国旅行をした回数が一番多いのは、僕でなかろうかと思えます。どこへ行ったかという、アメリカが2回、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパ、ハワイが9回ぐらい。

それで、障害者の人の海外旅行を企画してやるのですけれども、いつも行っている大阪の友人が「何のために、外国に行くんや？」と話をしてくれました。

日本という国は、障害者にとって非常に住みにくい社会で、そこで頑張ると、ものすごくストレスがたまるんや。百貨店行ってもどこへ行ってもちらちらと見られたり、大阪ではそんなことは大分少なくなりましたけれども、しかし、現実に一人で電動車いすで街へ出ているとか、介護者に頼んで街へ出ている人たちにとって、やっぱり日本の世の中というのは、きついし、ストレスのたまる社会である。その友だちは、ある団体の職員として、毎日外へ出ているのですけれども、ものすごく疲れてストレスがたまるので、年に一回ぐらい、外国へ行ってリフレッシュしてきます。

ちゃんと、一人の人間としてくれるのは、外国です。どういうことかといいますと、例えば、障害者の人と百貨店に買い物に行ったとします。店員さんというのは、車いすを押している方に話をします。障害者の方を向いて「何にしますか？」と絶対に言いません。

非常に困ったような顔をして、車いすを押している健常者の方へ向いて「何にしますか？」と聞いてくる。絶えずそのような場面が多いですね。しかし、アメリカとかヨーロッパの方へ行きますと、必ず、車いすの人を押して、Tシャツなどを買いに行くと(小便小僧のTシャツ)、店員さんが「誰が買うのやら」と聞いたら、車いすの人だと答えると、その人と話している。僕ら(介護者)には関係ない。車いすの彼にいろいろ聞いている。それがどこへ行っても、買い物をして当たり前に行われている。そういうふうには、誰やかということではなく、障害者の人が頼んだら、障害者の人と話を聞くのが当たり前なのです。日本では絶対にそうはならなくて、障害者の人が頼んでいても、店員さんは後ろに言う。これが日本人の人というものに対する意識とか、障害者に対する意識なのです。まだまだその車いすを押している人間に向かいて、ものは変わってきていません。未だに、

一緒です。

僕は障害者の運動を18年やっていますけれども、確かに、いろんな場面、場面で変わりました。今では、大阪の繁華街を電動車いすで行けないところはないですけれども、今まで通れなかったところには、エレベーターがついたり、いろんな方法でクリアできるようになりましたけれども、現実には人というのはあまり変わっていない。

障害者の人は障害者としか見ない。障害者という以前に同じ人間としてみない。そのことが日本の障害者の人が街へ出づらくなっているのだろう。じゃ、これをクリアするにはどうするかというと、障害者の人が自分で街へ出るしかない。皆さんが街へどっと繰り出せば、毎日、毎日、七尾の駅前でうろうろすれば、当然あの辺に車いす用トイレが立派なものができるはずですよ。そんなふうに、自分たちの手で何かを変えて行くときには、何かを始めるのは、自分たちです。

何をしたいかと、わからん方がたくさんいらっしゃいます。とりあえず、七尾市では、障害者の方が参加するボランティア活動を広めて行くということですから、誰にでもできることは必ずあります。寝たきりの最重度の障害者になっても、できることはたくさんあります。

琵琶湖学園という施設があるのでありますが、そこに僕の友人で、もう完全に体幹の障害がひどくて、横になってストレッチャーに体をくくりつけている状態なんです。

彼はユーミンのコンサートが好きで、いつも、僕は大阪に住んでいましたから、向かいに行ってストレッチャーを固定する車が、琵琶湖学園がつぶれてしまいそうなフォークサイズの車に、ロープをたくさん持って行って、みんなでストレッチャーを荷台に乗せてロープでぐるぐる巻にして、動かんようにして、名神を走って大阪までコンサートを見に行きました。

僕の友だちがいつも大阪で合流していますが、たまたまユーミンの好きな子が一緒に行くというわけですが、その子は車いすの人と全く出会ったことがなかったので、僕がその子をとめて「ちょっと、手伝ってくれ」と言うことをいったら、びっくりしてしまっただけ。「その人は、どういう人や、」「障害を持ってる人や、」「しゃべれるのか」ほとんど、向こうもことばが分からない。それでも、「僕はユーミン？、表で待っているから。」始めて障害者の人と出会ったということだった。

「非常に楽しかった」ってその子が言っていた。

「同じ音楽が好きだった」ということで、非常に友だちになれたような気がする。彼には人を楽しくする力を持っている。

よく、施設の職員の方は、この人にはこんなことができるだろうとか、できないだろうと考えますが、違うですね。誰でも100%の可能性があるのでよね。

それを勝手に自分の思いで、健常者の人の概念で、この人はここまでは無理だろうとか、ここまではできるだろう、ということを考えて壁を作るのは、障害者の人が何かをできなくするのは、一番出来なくさせるのは親、その次は施設職員、それは障害者の人との可能性をものすごく摘み取ります。障害者の可能性を摘み取らないように何かを始めて下さい。

講演終了。

これからの原稿募集テーマについて

- ・私とパソコン(あなたとパソコンの出会い、利用方法)
- ・私の介護体験(家族、施設での介護、行事、イベント等での介護体験を募集します。)

連載企画募集中

あなたも「HSK季刊わたぼうし」にユニークな連載企画をしてみませんか。趣味、講座、エッセー等。年4回の担当をお願いします。

編集後記

10年間、「HSK季刊わたぼうし」の編集をしてきて、何のために発行しているのだろう、こんな内容で読者は満足してくれるのだろうか、自分の自己満足の紙面ではなかろうか?と思うことがあります。

しかし、一人でも楽しみにしている人がおいでなら、その人のために頑張ります。これからも自己満足の内容で、パソコンに打ち込んでいきます。

話題は変わりますが、パソコン愛好家の方々がお待ちかねの基本ソフト「WINDOWS 95」が、もうすぐ発売されますね。体験された方は当機関紙に感想を投稿して下さい。

(Z.O)

NO.40のテーマは「私とパソコン I」